

柴田 武・國廣哲彌
長鳴善郎・山田 進

ことばの意味 1

辞書に書いてないこと

ことばの意味

辞書に書いてないこと

柴田 武・國廣哲彌
長嶋善郎・山田 進

平凡社

柴田 武(しばたたくし) 1918年名古屋市に生まれ、20歳まで同地。以後、東京。東大文学部言語学科卒。東大助手、国立国語研究所員、東京外大教授を経て、現在、東大教授。言語学・方言学。著書『日本の方言』(1958)、『ことばの社会学』(1965)、『言語地理学の方法』(1969)

國廣哲彌(くにひろてつや) 1929年山口県宇部市に生まれ、16歳まで同地。20歳まで山口市。24歳まで東京。以後、萩市、松江市、水戸市を経て39歳から東京。東大文学部言語学科卒。現在、東大助教授。言語学・意味論。著書に『構造的意味論』(1967)、『意味の諸相』(1970)、『日本語の意味・語彙(シンポジウム日本語)』(共著、1975)

長嶋善郎(ながしまよしお) 1940年長野県小諸市に生まれ、1歳から9歳まで新潟県佐渡。以後、東京。上智大外国語学部英語科・東大文学部言語学科卒、東大大学院修士課程修了。言語学。現在、独協大助教授。訳書にR. ヤーコブソン『一般言語学』(共訳、1973)

山田 進(やまだすすむ) 1948年東京に生まれ、26歳まで同地。以後、名古屋市。東大文学部言語学科卒、東大大学院修士課程修了。言語学。現在、名古屋工業大学講師。

平凡社選書47

ことばの意味 辞書に書いてないこと

1976年9月10日 初版第1刷発行

1979年2月13日 初版第7刷発行

定 価 1200円

著 者 柴田 武・國廣哲彌
長嶋善郎・山田 進

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町4番地1

郵便番号 102 振替 東京 8-29639

電話 東京 (03)-265-0451

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社石津製本所

© 代表=柴田武 1976 Printed in Japan

不良本のお取替えは直接本社サービス課まで
お送り下さい(送料は本社で負担します)

ことばの意味

辞書に書いてないこと

柴田 武・國廣哲彌
長嶋善郎・山田 進

平凡社

知照のむすこ
2000年

2000年 2月 1日
2000年 2月 1日

2000年

2000年

まえがき

ことばの意味とは何だろうか。同じことばでも文章のなかでは違った意味を持って来る。しかし、どんな文章のなかでも変らない一定の意味があるのではないか。そのことばの意味の核みたいなものである。

辞書にはこういう意味の不変的な部分が記載されているはずなのに、現実の国語辞書はこの点にはだ心もとない。ことに、意味の近いことばについては、そっちを見ろ、あっちを見ろという指示だけか、単に言いかえるだけで、砂漠のなかの川のように、源のところはついにわからずじまいに終わることが多い。

ことばの意味は、一見、漠としてとらえにくいものである。とらえたつもりでも、手にしたという実感が伴わない。いったい意味を分析することができるのだろうか。

意味を分析するということは、特徴をいくつもとり出して、それらを加算するような形でそのことばの意味を記述できるようにすることである。この場合、それぞれの特徴は、できるだけ他のこ

とばの特徴にもなりうるようなものでなくてはならない。たとえば、アガルという動詞の意味の特徴として、

①空間的な移動

②下から上への移動

③到達点に焦点を合わせた移動

などをとり出すことができる。アガルの意味は、①+②+③+……で示することができるであろう。ところで、この特徴の①と③はそのままオリルという動詞の意味の特徴でもある。②の代わりに、上から下への移動を加えればいい。くわしくは本文の当該項目を参照されたい。

こういう分析は、言語学が音や文法に適用して成功したものである。音や文法は、耳で聞くなり、目で見えるなり、感覚でとらえることのできる範囲内にあるが、意味は感覚ではとらえられないものである。ところが、そうした意味についても分析ができるようになったのである。

それでは、ことばのどの部分から意味の分析を始めたらいだろうか。ことばといっても、一つの単語にして考えると、その量は大変なものである。しかし、これにも、基礎になる重い部分と、その上にあつて多少浮動的な部分とがある。前者が基礎語と言われるものである。われわれが生活をし、ものを考えるのに、最小限度これだけは必要で、それ以上は余分といってもいい、比較的少数の語彙が基礎語である。基準をいくら甘くしても、一千語は超えないほどの大きさと思われる

る。基礎語の意味がわかれば、非基礎語の意味についても自然に解けることがある。また、後者に比べて前者の分析・記述は一体に厄介である。厄介だけれども、これが基本だという考えから、われわれは基礎語から手をつけることにしたのである。

しかし、「花」とか「見る」とかいう基礎語の意味を、大まじめに考えて何になるだろうかという素朴な質問も受ける。こんなことは日本人なら、だれひとりまちがって使うこともないだろう。こんなことばの意味を辞書で調べようとする人はいないと考えるからであろう。だから、国語辞書も最近まで、この種のことばの語釈についてはお座なりな扱いしかなかった。

国語辞書をそのような貧困から救うのには、まず、日本語の基礎語の意味を完全に記述した『日本語基礎語辞典』といったものをわれわれは手にしたいと考えた。これが、以下に述べる意味論研究会のグループが最初に立てた目標であった。しかし、その目標は、まだ視界に入らないくらい遠く霞んだところにあって、いまは、基礎語のうちの動詞の、そのいくつかについて分析を終わったところである。

まず動詞からとりあげることにしたのは、意味分析が比較的やさしいと考えたからである。意味分析が比較的やさしいというのは、一つには、動詞ならば、外界の事柄についての具体的な知識をあまり必要としないからである。たとえば、「結ぶ」と「結び昆布こんぶ」とを比べてみれば、後者の意味を書くのには、その物自身を知っていなければ、どうしようもないということがある。また、一

つには、動詞には分析のための共通の柱がいくつもあるということである。「何が」「何を」「何に
 対して」「何をもって」「どうする」などなどの柱について、一つずつ解きほぐしていくことができる。
 たとえば、「研ぐ」と「砥石」とを比べてみれば、後者は、ぎりぎりのところ「研ぐために使
 う石」で十分で、「研ぐ」の主体・対象・方法などは、動詞「研ぐ」のところで分析されるべきこ
 とがらである。

意味分析は、比較・対照ということがなければ、思うようにははかどらない。ある動詞を一つだ
 けとりあげて、その意味を考えようとしても、それは手ごたえのないわざである。そこで、つねに、
 意味の近いことば(類義語)との比較・対照を考慮した。そのために、類義語の組み合わせをいくつ
 も作った上で、それから、国語辞書で分析不十分と思われるものを選び出すようにした。もとも
 と、われわれの仕事が国語辞書の建設的批判にあるからである。

われわれがここで試みているのは、ことばの意味の歴史的変遷の記述でもなく、また、語源的意
 味の解明でもなく、時代を超えた汎時的な意味の把握でもない。現代に限って、われわれが使って
 いるわれわれのことばを自分たちの頭で分析しようという試みである。言語学の術語で言えば、日
 本語の使用者による現代日本語の意味の共時的分析ということになる。

一九七二年の秋、柴田はこうした意味分析に関心を持つ仲間三人を誘って、意味論研究会をつく
 った。メンバーの構成は、世代と出身地について片寄りがないように配慮したつもりである。こう

して、一九七二年十一月三十日の第一回会合以来、月一、二回集まって、共同討議し、ここにまとめたような成果を得ることができた。すでに、そのときどきの成果は、一九七三年五月から、ほとんど毎月、『月刊百科』（平凡社）の「ことばの意味」欄に発表して来ていて、少数の人の目には触れている。（各篇の末尾に発表の年月を示す）しかし、この雑誌が店頭売りされていないので、もっと広く読んでいただくために、こうして一本にまとめることになった。

『月刊百科』に発表するのには、ごいしろうというペンネームを使った。「五井四郎」でもあり、「語彙知ろう」でもあり、「語彙四郎」でもある。すべて、四人の男、柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進の共同研究であって、ただ文章にまとめるのは交代だったので、一貫して共通の名前を使った。『物理の散歩道』のロゲルギストのひそみにならうという気持もあった。（各篇の末尾に執筆者を示して文責を明らかにした）

われわれは、出来合いの型紙で裁断するというよりは、裁断をしながら型紙のデザインも開発するという姿勢にあるから、一九七三年五月と一九七六年三月との間には明らかに変化がある。われわれはこれを進歩と信じているが、この跡はそのまま残すことにした。発表の日付順に見直すならば、ごいしろうの研究歴を跡づけることもできるだろう。文章の書き方にしても、用例の挙げ方にしても、この間に多少の変更があるが、それも、不都合なことがない限り、発表当時のままにした。ごいしろうの意味分析の特色の一つは、「直観」を重んじるということである。直観であるため

に、四つの直観は必ずしも一致しないだろうと、それをおそれていたが、始めてみると、むしろ一致することが多いのに驚いた。一致しないのは、年齢差か、出身地の方言差か、経験の差かによるものであった。そのことがわかった場合には、そのこと自身が成果の一部になった。

直観を重んじるといっても、客観的な用例を無視するというのはない。「あとがき」の参考文献を参照）辞書をはじめ、すでに研究書などに登録されている用例に目を通すことはもちろん、直接に、具体的な用例をあされるだけあさった。ただ、用例を集め終わった後でなければ分析を始めないというのではなく、まず直観から始めて、用例に当たり、用例から直観に戻るという経路を選んだということである。

この一本はわれわれの研究の第一報である。機会が与えられれば、続報を送りたいと思う。『月刊百科』には、今後も、ごいしろうの名で毎月発表を続けることになっている。

一九七六年五月一日

編者

目次

まえがき..... 3

アガルとノボル..... 14

サガル・オリル・オチル・クダル..... 24

アルキマワル・ブラツク・ウロツク..... 32

ツカレル・クタビレルなど..... 39

サケルとヨケル..... 47

チカヅクとチカヨル..... 56

アタルとブツカル..... 63

＊

ムスブ・ユワエル・ツナグ・ククルなど..... 71

ツツム・クルム・マク..... 79

トク・トカス・ホドク・ホグス..... 87

マゼル・ネル・コネル..... 96

トグ・ミガク・フク……………	105
サスル・コスル・スル……………	114
フレルとサワル……………	122
ネジル・ヒネル・ヨジル……………	130
メクル・マクル・ハガス・ハグ・ムク……………	139
モグ・チギル・ムシル・ツム・ヌク……………	148
ニギルとツカム……………	156
ツマムとハサム……………	165
ナゲルとホウル……………	172
ナグル・ブツ・タタク・ハタク・ウツ……………	180
ツル・ツルス・サゲル・カケル……………	188
*	
ハズムとハネカエル……………	196

ハネル・ハシケルなど.....205

クボム・ヘコム・ヒッコム.....214

モレル・モル・コボレル・アフレル.....221

ニジムとシミル.....230

フル・シタタル・タレル.....239

ツケルとヒタス.....248

ホスとカワカス.....255

アセルとサメル.....263

ヤケル・コゲル・モエル・イブル・クスブル.....271

ノコルとアマル.....281

あとがき.....290

索引.....294

ことばの意味——辞書に書いてないこと

アガルとノボル

天守閣の内部に入ってみる。鉄筋コンクリートの柱が雑然と、ひどく殺風景。甲子園や後楽園の、スタンドの裏側みたいだ。この没趣味をかえて面白く思いながらエレベーターで天守閣のてっぺんに上った。(岡本太郎『日本再発見』)

「上った」はアガッタともノボッタとも読める。しかし「上る」が常にアガルでもノボルでもよいという訳ではない。アガルとノボルがどう違っているかをこれから考えてみよう。その上で冒頭の文の「上った」を見ればどう読んだ方がびったりするか「再発見」されるだろう。

まず空間的な移動の場合について考える。

1 a 呼ばれて二階にアガッタ。

b ×呼ばれて二階にノボッタ。